

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370343

研究課題名(和文)オノレ・ド・バルザックの文学における音楽

研究課題名(英文)Musique in the literature of Honore de Balzac

研究代表者

博多 かおる (Hakata, Kaoru)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60368446

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：オノレ・ド・バルザックの小説における音楽の役割を、小説で論じられている声や楽器の概念、音楽作品の内容、コミュニケーションや種々の伝達行為における音楽の役割などに着目して分析した。その結果、音楽作品の引用が、小説の登場人物像や象徴の体系の形成、社会的関係性の暗示、書き言葉が表現する言葉の抑揚やそこに含まれる静寂についての考察、コミュニケーションに関する思考などにおいて果たす役割を明らかにすることができた。また音楽作品と小説の言説の重なり合いから複数の読みの可能性が開け、意味の重層性やアイロニーが生まれるプロセスも具体的に見て取ることができた。

研究成果の概要(英文)：We analyzed the role of music in the novels of Honore de Balzac. This study focuses on concept of the voice and the instruments, on the role of music in communication and a variety of transmission behavior. Citation of music in the novels contributes to the construction of character image and the system of symbols, to the implication of social relationships; it offers many important elements when the novels deploy the reflection on the intonation and silence included in the oral expression, transcribed into written language. The music realizes often a transparent communication but in other cases, it explains some visible or not visible thresholds. Also the possibility of more than one reading is open because the overlap of the discourse of music works and the literature. The evocation of contemporary music creates the polyphony and irony in Balzac's novels.

研究分野：フランス文学

キーワード：オノレ・ド・バルザック 文学と音楽 口語と書き言葉 ポリフォニー フランス文学 ヨーロッパ文学

1. 研究開始当初の背景

19世紀の作家、オノレ・ド・バルザックの文学作品について、以前に行った感覚風景についての研究、小説の言葉の音楽的側面についての研究、フランス文学・音楽における世界と自我の表象についての研究の一部などをさらに深め、音楽作品との関係から新たな研究の可能性を開くことが必要であると考えた。

バルザックと芸術作品については、小説にあらわれる絵画作品を分析した著作や、音楽作品に関するいくつかの考察がある。だが、実際にバルザックが用いた言語と音楽についての本格的な研究はいまだなされていない。その欠落を埋めるべく、この研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究は、オノレ・ド・バルザックの文学作品と、フランス19世紀社会で展開された多様な音楽活動の関連を、社会の変容や、各社会グループの感性や趣味の差異をふまえて、調査しようとするものである。バルザックの作品が提案する社会観察や人間精神の研究、記憶の作用の探求において音楽が担う機能を、文学テキストの分析と音楽分析をとおして明らかにする。バルザックの作品が他の芸術言語に影響を受けつつ、観察と思考の場としての文学を築いていった経緯を明らかにする。

3. 研究の方法

バルザックの作品における音楽への言及を調査、解析した上で、語彙分析と作品の読解をもとに、対象とする作品を絞り、教会、劇場、サロン、家庭、広場など、多様な音楽活動の場を見極めた。まずはバルザックにおける宗教音楽と、「世俗の」音楽の関係について調査を行った。

一方ではベルリオズの『レクイエム』と関連作品の分析をもとに、死をめぐる19世紀の新しい音楽言語とバルザックの小説の連鎖を見た。他方では、ロッシーニやチマロザ、ポイエルデュ、マイアベアらのオペラがいかに『人間喜劇』の作品の中で引用され、分析されているかを調査した。

フランス国立図書館において当時の楽譜を閲覧し、その楽曲分析をもとに、作品に引用されている音楽がテキストと重なって生み出す意味、聴覚的効果、暗示などを読み解いた。また当時の作品の受容について、音楽雑誌や、音楽家・劇場支配人らの回想録をもとに調査を行った。さらに、当時の楽器に関する文献調査をもとに、音楽作品の引用が登場人物の造形においていかなる役割を持ち、その社会的位置の定義にどのように関わっているかを見た。

バルザックの作品における音についての哲学的考察の解析も、テキスト分析をもとに行った。さらに、近年のバルザック作品にお

ける口語表現の研究を、フランスの研究者との交流もまじえて発展させつつ、口語を書き言葉に書き写すという行為がバルザックの作品において持つ音楽的側面を分析した。

4. 研究成果

<全体の成果>

オノレ・ド・バルザックの小説における音楽の役割を、小説で論じられている声や楽器の概念、音楽作品の内容、コミュニケーションや種々の伝達行為における音楽の役割などに着目して分析した。その結果、音楽作品の引用が、小説の登場人物像や象徴の体系の形成、社会的関係性の暗示、書き言葉が表現する言葉の抑揚やそこに含まれる静寂についての考察、コミュニケーションに関する思考などにおいて果たす役割を明らかにすることができた。また音楽作品と小説の言説の重なり合いから複数の読みの可能性が開け、意味の重層性やアイロニーが生まれるプロセスも具体的に見て取ることができた。

(1) 音楽作品との関係において

ベルリオズ、チマロザ、ロッシーニ、グレトリー、マイアベアらのオペラ作品の小説内への引用と、それに関するバルザックの分析が、小説の多声的な構造や、各人物の語調を豊かで多様にする試みに結びついていることが理解された。作品そのもののみでなく、音楽作品を流行させた歴史的背景が喚起されることで、別の政治形態のもとでのフランス社会を皮肉な視点から観察することが可能になっていることも理解された。つまり、音楽作品の小説への引用は、重層的な歴史観をバルザックの小説において生み出している。

(2) 楽器演奏について

楽器演奏については、楽器の進化と流布、楽譜印刷技術の改良などの社会的側面が作品に反映されているとともに、演奏されている曲の内容、しかも引用されている箇所のみならずその周囲の文脈が、文学作品の読解、人物造形と結びつく。また楽譜を小説の中に印刷する試みは、バルザックの小説がはらむ、現実の空間とフィクションの空間、書物の空間をつなぐ思考を例示するものである。

(3) 哲学的、思想的側面において

バルザックの<哲学的研究>等の、音楽にかかわる著作においては、身体と精神の関係、透明なコミュニケーションが特に声を通して探求されているが、そこには音楽と機械の関係についての思考の萌芽が見られることもわかった。音楽は時に敷居を排除した透明なコミュニケーションを可能にするが、精神の不可解なフィアスコや機械的な気まぐれ等によって、演奏が妨げられたり理解不能になったりし、さまざまな敷居があらわになる例も見受けられた。

(4) 語り言葉と書き言葉

語りの音楽性、言葉の余白にある静けさや、楽器演奏に喩えられる分節化されていない音とその演出についても分析した。文学作品における会話や作品の構造自体に音楽的な概念が組み込まれている場合にも、複数の主題が対位的に絡み合いながら、かならずしも共鳴しないことによって、社会における階級間の対立や思想・文化面における軋轢が表現されていることを明らかにした。『カディニャン公妃の秘密』に関する論文では、話し言葉を書き言葉に組み込むという、バルザックの小説の一つの大きな軸である試みが、音楽作品や楽器への言及、その引用によって具体的に可能になった箇所を具体的に解析することができた。

<総括>

研究を進めていくうちに、バルザックが実現した「小説」と呼ばれるジャンルが、複数の芸術分野を交差、共鳴させる試みであることが理解された。それまで文学の主要なジャンルであった韻文による劇作品にかわってこれらの散文作品が発展していくにあたり、特にバルザックという作家が、同時代に創造・上演されていた音楽作品を話し言葉と関係づけて書き言葉の中に組み込むことにより、『人間喜劇』を賑やかな音の宝庫、音楽作品と響き合う装置として組み立てたことが理解できた。

以上の研究は、国内において行われてきたバルザック研究のすでに豊かな成果をふまえ、文学に実は深くかかわっているがこれまで明晰に述べられることのなかった音楽の分野と近代小説の関係に新しい光を当てる試みである。この成果の一端をフランスの学会で発表することによって、口語と書き言葉の関係という側面から新たな研究の視点を提供することができたが、今後、書物として発表するなど、成果の全体を広く発信していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

博多 かおる、『カディニャン公妃の秘密』の庭、『仏語仏文学研究』塩川徹也先生古希記念号、査読あり、2016年刊行予定(ページ未定)。

[学会発表](計5件)

博多 かおる、Interpréter la polyphonie dissonante – la lecture des rumeur dans les romans de Balzac (不協和なポリフォニーを解釈/演奏する バルザックの小説における噂の読解), “Le phénomène oral. Dynamiques de la

parole balzacienne (話し言葉、口語のダイナミズム)、Groupe International de recherches balzaciennes (国際バルザック研究会)、パリ第7学ピエール・アルブーイ講堂、2015年6月19日。

博多 かおる、バルザック 街の歌、名古屋大学文学研究科講演会、2014年12月17日。

博多 かおる、Traduction de Balzac au Japon (日本におけるバルザック小説の翻訳)、シンポジウム“Balzac et la Chine”(バルザックと中国)、Groupe International de recherches balzaciennes (国際バルザック研究会、Maison de Balzac, Paris (パリ、バルザック記念館)、2014年6月28日。

博多 かおる、Cousinage bête, 動物と人間のつながり、愚かな類似について) ワークショップ「人間と動物」、日本フランス語フランス文学会 2014年春季大会、お茶の水大学、2014年5月15日。

博多 かおる、なぜ食べるのか レストランと残飯のあいだ、研究発表会「バルザックと食」、日本バルザック研究会、お茶の水女子大学、2014年5月24日。

[図書](計1件)

博多 かおる、Véronique Bui、他、*Balzac et la Chine / La Chine et Balzac*、(博多かおるの担当箇所：Alchimie du dépaysement traduction de Balzac au Japon, Presses Universitaires de Renne et du Havre、2016年刊行予定(ページ未定)。

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

博多 かおる (HAKATA, Kaoru)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・
准教授

研究者番号：60368446

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：